

反復と逆転——分身の物語における二重性

林 和 仁

Summary

Repetition and Reversal: Duality in the Story of the Double

Kazuhito Hayashi

The story of the double ultimately presents the crisis of the loss of one's own identity threatened by the appearance of one's double, the repetition of one's own self, and describes the uneasiness of one's security imperiled by the reversal of the situation. This uneasy and unstable condition, however, is a universal one shared by any conscious man, and the double merely externalizes the inner conflict as manifest oppositions. Man's thought and action are the outcome of the opposing elements within, such as good and evil, moral and amoral, etc., namely the doubleness of the consciousness. In that sense, the officious double in "William Wilson" and "evil" Mr. Hyde in "Dr. Jekyll and Mr. Hyde" both represent one aspect of the self caught in the endless process of repetition and reversal. The protagonists of these two stories err when they try to exterminate or externalize their doubles, and consequently lose their humanity as they deny their own duality. Furthermore, this duality as the process of repetition and reversal, prevails not only in characters, plot, and structure of the story, but also in the discourse itself. The story of the double is made up of the double text.

ドッペルゲンガー (Doppelgänger) とかダブル (Double) と呼ばれる「もう一人の自分」にまつわる話は古代から様々な形態をとって語られてきたが、その根底にあるのは、「もう一人の自分」に対する恐れ、言い換えれば、自己の反復による、アイデンティティー喪失がもたらす不安感である。同時にこの反復には逆転が伴う。分身が本体と入れ代わり、影が主体に取り代わる、いわば主客転倒の要素を常に含んでいる。これは当然のことで、反復が生じた瞬間に、その二つの存在の間には主従、真贋、虚実、その他の不安定な緊張関係が生ずるからである。

「もう一人の自分」はドッペルゲンガー、ダブル、分解 (Decomposition)、第二の自己 (the Second Self)、内なる自己 (the Inner Self)、分身、生霊、その他色々の名で呼ばれており、それぞれ異なった捉え方をされている。その様々な意味合いの違いの詳細は、ロジャーズ (Robert Rogers) あるいはケプラー (C.F. Keppler) のダブル論にまかせることにして、小論では、二つ以上の分身の場合も考えられるが、混乱を避けるために、主としてダブル (Double) をその用語として使用したい。またダブルの範疇に何を入れるべきかも議論の分かれるところであるが、主体の反復の見られるものを広く包括したい。心理学的な言い方を措けるならば、「分裂病者の論理である、 $1 = 1$ (自分は自分である) が成り立たず、 $1 = 0$ (自分がない)、または $1 = 2$ (自分と他人が同じになる、自分が二つに分かれてしまう)」(水島, 29)、の後の場合が当て嵌まるし、別の見方をすれば、掛け算の $1 \times 2 = 2$ (もう一人の自分がいる) と割り算の $1 \div 2 = \frac{1}{2}$ (自分が二人になる) が考えられる。自己の複数化である。

このような主体の反復としてのダブルは近代的な自我意識の産物だけではなく、昔から幻想的な物語に繰り返し現れる主題であり、物語の誕生と共に発生したものと言えるのではない。紀元前二千年にまで原型がたどれるといわれる、現在知られている最古の物語の一つである『ギルガメシュ』に既にダブルが登場する。「ギルガメシュの暴政に苦しめられているウルクの人々が創造の女神アルルに訴える。彼と同じものをつくれ。それを彼と瓜二つのものとし、彼のもう一人の自分となし、嵐のような心臓に対する嵐のような心臓とせよ。二人を闘わせしめ、ウルクを平穏にせよ。こうして、ギルガメシュと瓜二つの英雄エンキドゥが誕生する」(私市, 16)。物語は何らかの葛藤がなければ進行しないが、物語に物語性を与える最も原初的な対立の一つとして、また内面の葛藤を外面化する手段でもあったために、ダブルが用いられたのではないだろうか。

元来ダブルは、オットー・ランクによると、「死の力を積極的に否定するもの」、すなわち自我の破壊に備える保険であり、「不滅」の魂は肉体に対する最初の「ダブル」であったと考えられる (Freud, 356)。しかしいつの間にかダブルは「無気味なもの」、「死を連想させるもの」になってしまい、ここにある種の逆転が見られる。魂として死後の生命を保証するはずのダブルが、時がたつにつれて、本人の影や亡霊と見なされ、死の前兆として全く逆の意味を持つに至ったのである。やはり本質的に反復がもたらす不安感の作用だろうか。特に近代ではダブルを「自己のもう一つの暗い側 (the Dark Other Side of the self) の実体化」(Alter, 23) と捉え

る例が目立つ。ダブルの主題が19世紀に特に多くみられるのは、「ロマン派の芸術に繰り返し現れる、自己の失われた中心を求める精神の現れであろうし、近代社会における、自己のアイデンティティに対する不安感の現れであろう」(Jackson, 108)と考えられるし、ダブルの物語を18世紀のゴシック小説の延長上に捉えることも出来よう。

様々な反復の形態をとるダブルの具体例を参考までに挙げると、エドガー・アラン・ポーの「ウィリアム・ウィルスン」は「もう一人の自分」が出現する「二重身」の話であり、ロバート・ルイス・ステューヴンスンの「ジークル博士とハイド氏」は「自分が二人に分かれる」、「二重人格」の物語である。鏡像としてのダブルはギリシャ神話の「ナルキッソスとエコ」に見られるし、肖像画としてはオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』が典型的な例と言えよう。影としてのダブルにシャミッソーの『影を売った男』やアンデルセンの「影法師」がある。双子としてのダブルにはグリム童話の「二人兄弟」があるし、一人二役を含めると時代劇に無数の例がみられ、「遠山の金さん」もその一形態と考えられる。舞台での一人二役(double casting)ではシェイクスピアの『リア王』のコーディリアと道化を一種のダブルとして考察出来る。また最近のサイエンス・フィクションではクローンによるコピー人間としてのダブルがあり、ケイト・ウィルヘルムの『もはや鳥も鳴かず』がそれを主題としている。

反復の物語であるダブルの物語では、主題としての二重性が一見、表面化しているためにストーリー中心の読み方をされ易いようだが、反復の二重性は作品そのものに内在するもので、全体の構成を成す二重性は、サブ・プロットや細部の要素に見られる二重性の反復、さらにはテキスト自体の書かれ方そのものが含む二重性の反復と解釈出来る。小論では、具体的なテキストとしては、それぞれ典型的なダブルの物語であり、お互いに対照的な、ポーの「ウィリアム・ウィルスン」“William Wilson”(1840年刊行、雑誌には1839年掲載)とステューヴンスンの「ジークル博士とハイド氏の不思議な事件」“The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde”(1886年)を取り上げて、ダブルの物語が持つ二重性を、主題、構成、テキストに内在する反復と逆転の観点から考えてみたい。

この二つの作品にはダブルの物語であることに加えて、多くの共通点がある。第一に、両方とも“will”(意志、遺言状、その他)の物語として読める。まず「ウィリアム・ウィルスン」では主人公の“will”が強調される。「わたしはわがまま(self-willed)になり、とてつもないきまぐれにふけり、まったく手に負えぬ激情に取り付かれていた。……たいていの幼児がまだ足よりも危なっかしい年ごろに、わたしはただ自分の勝手気まま(my own will)にまかされて、形はともあれ実質的には、おのが意のままに振舞うようになった」(672)。

ところがそこにもう一人のウィリアム・ウィルスン(以後、混乱を避けるためにウィルスン2と呼ぶ)が現れて少年達のリーダー格であった主人公とことごとく対立する。「このわたしの同姓同名者だけが、学校の勉強でも——運動場の遊戯や喧嘩でも、あえてわたしと競争しようとし——わたしの主張に対する盲目的な信仰やわたしの意志(will)への服従を拒絶し——じっさい、およそ何につけてもわたしの勝手気ままな命令に邪魔立てしようとするのだった」(630)。すなわち主人公とウィルスン2の対立は意志(will)の衝突になる。「わたしに対して彼

が何かかばい立てするような、いやな様子を示したり、しばしばうるさくわたしの意志 (will) に干渉したりすることは、すでに一度ならず述べた」(632)。

大学に進学した主人公は相変わらず勝手気ままにすごしている。「やがてオックスフォードに赴いたが、両親の無分別な虚栄心のおかげで、すでにわたしにとってなくてはすまぬぜいたく三昧にも思いのまま (at will) ふけることもできた」(635)。しかし主人公は、賭博のいかさまをウィルスン2に暴かれて、大学を去り、ヨーロッパを放浪するが、企む悪事のことごとくを、ウィルスン2に邪魔されてしまい、ついには主人公の意志 (will) が、ウィルスン2の意志 (will) に屈してしまう。自発的であるべき意志が、他人の意志に従ってしまうことで、ここに意志の逆転が見られる。「これまでわたしは、ウィルスンのけだかい性格、その立派な智慧、それにまたいかなるところにも姿を現わし、いかなることをもなし得るかに見える能力に対して、つねに深い畏怖の念をいだいていた。……これまではこうした気持がはたらいて、こちらはまったく無力で手の出しようもない、横暴な彼の意志 (will) には、いやいやながらも黙って従うほかはなかり、そんな風に思い込んできた」(640)。

同様に「ジーキル博士とハイド氏」においても“will”が重要な役割を果たしている。まず冒頭の場面で、弁護士のアタスン氏は「金庫を開いて、いちばん奥から『ジーキル博士遺言状』 (Dr. Jekyll's Will) と書いた封筒入りの書類を取り出すと、腰をおろし、眉を曇らせながら、その内容を調べはじめたのだ」(9)。アタスン氏が心配しているのはジーキル博士の遺産相続人になっているハイド氏について何も知らないからである。やっとのことでアタスン氏は謎の人物ハイド氏と対面する。『さあこれで、またお会いしてもわかります』とアタスンは言った。『いずれ何かの役に立つでしょう』『そう』とハイドは答えて、『お会いしてよかった。ついでに、わたしの住所も知らしておこう』と、ソウホウ街のある通りの番地を教えた。『おやおや！ こいつもまた、あの遺言状 (will) のことを考えていたんだろうか』とアタスンは考えた……」(13)。アタスン氏が遺言状 (will) を気にしているのは、遺産相続人のハイド氏について悪い噂ばかり耳に入って来るからだ。「それにまた危険千万なことだ！ もし、このハイドというやつが、遺言状 (will) のあることを嗅ぎつけたら、遺産相続が待ち切れなくなるかもしれないではないか。そうだ、一肌ぬいでやらなければならん——もしジーキルが、委せてさえくれたら (will but let me)」(15)。

遺言状 (will) に始まった物語がやがて意志 (will) の物語になる。薬品によってハイド氏に変身出来るようになったジーキル博士はそのうちに薬品なしでハイド氏になってしまい、ジーキル博士に戻るために薬品を必要とするようになる。すなわち一つの肉体を二つの人格が争うことになり、ジーキル博士とハイド氏の意志 (will) の闘いになる。物語ではハイド氏の意志が強調される。「生命の危険にさらされている時のハイドは、わたしにもはじめて見るものだった。異常な憤怒に身を震わせ、人殺しもやり兼ねないほどに興奮し、人に危害を加えようと躍起になっている有様であった。しかしこの男は抜け目がなかった。非常な意志 (will) の努力で怒りをおさえ、一通はラニョンに、他の一通はプールにあてて、二通の重要な手紙を認めおわると、投函した確証を握っておくために、書留郵便でだすように指図したのであった」(59)。

「ウィリアム・ウィルスン」の場合と同様に、本体であったジーキル博士が分身に乗り取られ、ハイド氏の意志（will）に支配されてしまうのである。ここでも意志の逆転が起こっている。

この二つのダブルの物語のもう一つの共通点は、登場人物の名前に意味が込められていることである。タイトルともなっている「ウィリアム・ウィルスン」(William Wilson)を分解すれば、“Will I am, Will-son”となって、「私は意志（will）、意志（will）の息子」と読める。意志の息子とは、悪行を犯そうとする意志を抑制する良心と解釈出来る。タイトルに続く引用文「それを何と言うぞ？ わが道に立つ妖怪、恐ろしき良心を何と言うぞ？」が示唆するように。さらにこの名前に二度くりかえされる W は“double you”「あなたを二人に」と発音されるためにダブルの物語であることを暗示している。問題はこのウィリアム・ウィルスンという名前が仮名という設定になっていることだ。「この物語の中では・・・わたしは自分をウィルスンと呼ぶことにしたが、これは本名とは非常にかけはなれてはいない仮名なのだ」(629)。ウィルスン自身は仮名を使う理由を、「せっかく清浄なこのページを、わたしのほんとうの名で汚すにはおよばぬことだから」(626)と述べているが、納得出来るほどの理由ではない。ウィリアム・ウィルスンが本名であってはいけな理由もさしてあるわけでないで、物語の虚構性を増すために設定されたとも考えられる。

ただ主人公は異常なまでに自らの名前に嫌悪を示している。「わたしは自分のあまり上品でない姓と、たとえ賤しいとまではいわずとも、しごくありふれた名とをいつもいやに思っていた。この姓名を耳にすると、何か毒でもつぎ込まれたような思いがした」(631)。この主人公には貴族趣味のようなものがあって、自分の名前が庶民的であることが腹立たしいのかも知れない。「貴族の血はひいていたが、わたしの名は世間のありふれたものの一つで、時効から生ずる権利によって、もうずっと昔から庶民たちが誰でもわがものとして用いていたような名であったから」(629)と述べているし、オックスフォードで主人公にいかさまによって多額の金を巻き上げられようとした学友グレンディングは、「成り上がり」(*parvenu*)の貴族であったために、ペてんの対象に選ばれたのかも知れない。主人公がウィルスン2に抱く敵意もその始まりは名前にある。「わたしがこの学校に着いた当日、第二のウィリアム・ウィルスンもまた学校に入ってきたので、わたしは彼がこんな姓名を名乗るのを腹立たしく思った。そして他人がこの姓名を名乗り、それがわたしの名を二重に繰り返される原因ともなり、またたえずこの同姓者がわたしの前に現われ、・・・この厭うべき暗合のために、この男に関することが当然このわたし自身のこととたびたび混同されるだろうと思うと、なおさら自分の姓名がいやになってくるのだった」(631)。このようにたださえ反復的な名前が同姓同名者によって繰り返されることに対する嫌悪感は、ただ単に反復を忌み嫌うだけではなく、名前を知られたり、呼ばれたりすることで、名前の持つ魔力に支配されることへの恐れをも含んでいると考えられる。このへんにウィリアム・ウィルスンが仮名を使う理由があるのかも知れない。

一方「ジーキル博士とハイド氏」においても、そのタイトルに固有名詞が使われているし、登場人物の名前はかなり意図的と言えよう。まず視点人物になって、狂言回しを勤める弁護士のアタスン氏は文字通り“Utter-son”（語る人）である。“Utters on”（語り続ける）と分けた

ほうが良いのかも知れない。ハイド氏はジークル博士の中に隠れている人格であり、小説中でも意識的に使われていて、「あいつが隠れ役 (Mr. Hyde) なら、おれは捜し役 (Mr. Seek) になってやる」(12) と、かくれんぼ遊び (Hide and Seek) に引っ掛けてアタスン氏が言うところがある。あるいはハイド氏はすべての人々の中に潜む (hide) 悪を象徴しているのかも知れない。

ジークル博士であるが、一部フランス語を援用すると、“Jekyll \Rightarrow Je kill \Rightarrow I kill” (わたしは殺す) となる。ハイド氏が犯す殺人は、もともとジークル博士が無意識の衝動として持っていたものが、ジークル博士の中に隠れていたハイド氏の行動となって顕在化したものだから、本質的にはジークル博士の罪であると思えることも出来る。さらに最後に服毒することによってハイド氏になった自己を抹殺することは一種の殺人であるし、“I kill” を「自らを殺す者」と解釈すれば、その名前に既に結末が暗示されていることになる。「手に持っている壊れた薬瓶と、部屋じゅうに漂っている強烈な杏仁水の臭いから考えて、アタスンは、目の前の死体が、自らの命を断ったもの (the body of a self-destroyer) であることを知った」(39)。

さらにハイドとジークルを並べてみると、Hyde—Jekyll であってアルファベットの順では “I” が間に来る。「ジークル博士とハイド氏」の物語は、自我(I)がハイド氏(H)とジークル博士(J)の両方に引っ張られて中ぶらりんになっている物語 ($H \leftarrow I \rightarrow J$)、あるいは ($id \leftarrow ego \rightarrow superego$) の物語と読んでも良いだろう。

いつハイド氏に変身するか分からない不安定な状態にいるジークル博士はその状態を「いまのわたしの名状し難い立場 (my nameless situation)」(41) と述べているが、まさにジークル博士でもなく、ハイド氏でもない、「名前のない」状況なのである。最後の薬品を使い果たせば、ダブルの本体であるジークル博士は消滅し、隠れていたはずの分身ハイド氏だけが存在するという逆転がここにも生じる。

「ウィリアム・ウィルスン」においてもさきほど少し触れたように、ダブルを良心 (conscience figure) と見なした場合、自らを観察し、批判する精神の実体化と考えて、“superego” もしくは “ego-ideal” としてのウィルスン2を考えることが出来る。「ローマでは、またなんと不都合な折に、しかもまるで幽霊さながらにうるさく出しゃばってきて、わたしの野心を挫いてしまったではないか。さらにウィーン——ベルリン——そしてモスクーでも！ じっさい、心中にえ返る思いで彼を呪わずにすんだような場所がどこにあったか。…… しかも、地の涯まで逃れても、ああ、わたしの逃走は何の甲斐もなかったのだ」(639)。ウィルスン2は偏在するかのごとく、主人公が悪事を行おうとするまさにその瞬間、姿を現わして主人公の邪魔をする。そしてウィルスン2は、そのことを義務と考えている。「諸君、このわたしのぶしつけな振舞についてお詫びいたしますが、それというのもわたしは義務を果たしているのですから」(637-38)。

ウィルスン2はあらゆる点で主人公と似てゐるが、たった一つ違う点は大声が出せないことである。「わたしの競争相手は何か咽喉の器官に欠陥があって、いつでもその声をとても低いささやき声以上に高くすることがどうしてもできないのだった」(631)。当然、良心のささやき声

(the small voice of conscience) を連想させる設定である。ハイド氏も「しわがれ声で、ささやくように (husky, whispering), いくらか途切れがちに話す」(13) ことを付け加えておきたい。もっともハイド氏はどう見ても良心の実体化とは思えないが。

「ウィリアム・ウィルスン」の最後で主人公とウィルスン2が対決するが、いつの間にか声が逆転していて、かすれ声で話すのは主人公である。『『この悪党め!』と、わたしは怒りでかすれた (husky) 声で叫んだが、自分が口にする一音一音が尚一層わたしの怒りをはげしく燃えさせたような気がした」(640)。この時の主人公はもはや単一存在ではなくなっている。「わたしはあらんかぎり興奮に狂い立っていたので、自分の片腕にも千万人 (a multitude) の力をおぼえた」(641)。鏡の中に見える姿は「たしかにウィルスンにちがいがなかった。だが、彼が語り出したとき、それはもはやいつものささやき声ではなかった。そして彼の語っている間じゅう、わたしは、自分自身が語っているのだとさえ思えるほどだった」(641)。主人公とウィルスン2の立場が逆転して入れ代わっているのか、それとも二人が合体してしまったのか、解釈が分かれるところであるが、曖昧なままに話は終わる。

前に引用した主人公のウィルスン2に対する畏怖の念は、厳父に対する子の態度を思わせる。またジーキル博士とハイド氏の関係にも、親子の間がらを連想させるところがある。この二つのダブルの物語を19世紀小説の主要な主題の一つである、「父と子の物語」として読むことも出来る。

ウィルスン2の忠告について述べている主人公は、まるで口うるさい父親の小言を懐かしく思い出している放蕩息子と思わせる。「そのいろいろな才能や智慧分別とまではいわずとも、少くとも彼の倫理感¹はわたしのそれよりはるかに鋭かったし、さらにその頃わたしがただあまりにも心の底から憎み、はげしく軽蔑するにすぎなかった意味ありげなあの囁き、そこに盛られた忠告を、あれほどいつもしりぞけてばかりいなかったら、今わたしはもっと善良な、それゆえにまたもっと幸福な人間となっていたかもしれない」(632)。またその忠告に反発する主人公の態度は、成長するにつれて親からの独立を求めて、父親に反抗する息子の感情を表している。「わたしに対して彼が何かかばい立てする (patronage) ような、いやな様子を示したり、しばしばうるさくわたしの意志に干渉したりすることは、すでに一度ならず述べた。このおせっかいはかんばんしからぬ忠告——大っぴらにはっきり言うのでなしに、それとなくにおわすような忠告となって現われることが多かった。わたしはこれをいやな思いで受けとったが、この気持はわたしが年齢を加えるにつれてますます強くなった」(632)。

同様にジーキル博士とハイド氏の間にも父と子の関係を読み取ることが出来る。端的な表現として、「ジーキルは父親以上の関心を持っていたが、ハイドは息子以上に無関心であった」(55) とある。ハイド氏がジーキル博士の所有物に行く悪さは、子供のいたずら、もしくは父に反抗する息子がやりそうな、子供じみた、いやがらせである。「ハイドはわたしに対して猿のごとき奸策をたくらみ、あるいはわたしの筆跡でわたしの書物に冒瀆の言葉を書き散らしたり、手紙を焼いたり、わたしの父の肖像を破り棄てたりした」(61)。ことにジーキル博士の父親の肖像を破壊することは、明らかに父性を否定する行為に相違ない。

悪の権化のごとく呼ばれるハイド氏なのだが、作品中ははっきりと描かれる犯罪行為はただ一つであり、それによって官憲に追われることになる、殺人である。「ハイドは、すっかり自制を失ってしまって、老紳士を地べたになぐり倒し、つぎの瞬間には、凶暴な猿のように、相手を足で踏みにじり、めちゃうちゃになぐりつけた。そのために、骨は音をたててくだけ、死骸は路上に跳ねあがった」(18-19)。しかしこの残虐な殺人行為には明確な動機がなく、ただ被害者が、「立派な、白髪の老紳士」であり、「親切な、むかし風の気質をあらわしている」顔つきをしていたこと、すなわち典型的な父性の象徴となる人物であったことしか、その理由が見いだせない。一見、無動機、無目的のハイド氏の犯行は「父親殺し」と解釈出来る。

一方ハイド氏の描写で繰り返して述べられるのは、その凶暴さにもかかわらず、その背の低さである。初めてハイド氏をみたアタスン氏は、「その男は小男で、ごく地味な身なりをしている。が、これだけ離れていても、なぜか見ている弁護士を、むかむかさせる顔であった」(12)という印象を受ける。また別の場面でも、「ハイドは、からだに合わないだぶだぶの、[ジーキル]博士のからだならよく合いそうな服を着ていた」(39)とジーキル博士に比してずっと小柄な点が強調されている。ジーキル博士自身はこのことを、次のように推測している。「わたしが今、生々しい活動力を与えたわが本性の悪の面は、それと同時に片付けてしまった善の面に較べると、強さの点、発育の点ともに劣っていた。更にわたしのこれまでの生涯が、十中八九まで努力と徳行と節制の生活であったために、悪の面は善の面にくらべて行使することも少なく、従って消耗も少なかったわけである。思うにヘンリィ・ジーキルにくらべて、エドワード・ハイドがずっとからだが小さく、弱く、若々しいのはこのためであったろう」(51)。

しかしハイド氏の「小ささ」と「若さ」を「十中八九まで」(nine tenths)の善行の結果と考えること自体にジーキル博士の問題がある。人間の行動や生活をそんなに割り切って捉えることが出来るのだろうか。それよりも、ジーキル博士を父、ハイド氏を子と見なせば、この二人の違いは頷ける。さらにはジーキル博士の中に隠れている(hide)人格としてのハイド氏には、作品の中で使われている「びっくり箱」(Jack-in-the-Box)のイメージがふさわしい(15)。別のところでもハイド氏がジーキル博士の中に入っていることを、洞窟と盗賊のイメージで捉えたりしている。「ハイドはジーキルに対しては無関心であったし、あるいはたかだか山賊が追跡をのがれて身を隠す洞穴を覚えているくらいにしかジーキルを覚えていなかったのである」(55)。

この空間的反復の一種である入れ子構造を時間的に解釈してはどうだろうか。さきほどの引用にもあったようにハイド氏の「若さ」が何度も強調されている。ジーキル博士もハイド氏に変身した時に、身体の「若返り」を実感している。「その感覚は一種異様な、一種言いようのない清新な感じで、その清新さのために信じがたいほど甘美な感じでもあった。わたしの肉体はこれまでよりもずっと若々しく、ずっと軽快になり、非常な幸福を感じた……」(50)。ハイド氏の「若さ」と対照的に、ジーキル博士及びその友人達の「老い」が明示される。『『ときに、ラニョン、おそらくヘンリィ・ジーキルのいちばん旧い友だちといえば、どうしてたって、きみとぼくだろうね』『友だちもお互いにもっと若いといいんだがね』ラニョン博士は笑いを含ん

だ声で言った」(10)。

そもそもジーキル博士が変身の願望に取り付かれたのは、享楽を求める気持を押し殺して、体面をつくろい、無味乾燥な学究生活を続けているうちに老いてゆく自分に嫌気がさしたからであった。「わたしの遊興なるものがまた（控え目に言っても）品位を傷つけているのものであったし、世間的にも有名で、少なからず尊敬を受けていたのみならず、年輩もようやく老年に近づいていたわたしには、かかる生活の矛盾をうとましく思う心が日に日に募って行くばかりであった」(52)。換言すれば、ハイド氏はジーキル博士の投影された願望としてのダブルに外ならず、こうありたかった、若き日のジーキル博士の再現なので、つまり時間的反復としてのダブルなのである。だから最初ジーキル博士は「不具と頹廢の跡が著しい」ハイド氏を受け入れ、もう一人の自分として認めるのである。「この醜惡な映像を鏡のなかに眺めながら、わたしは些かも嫌惡の情を感じなかったばかりか、かえって小躍りして歓迎したいほどの感じを味わった。これもまたわたし自身だったのである。それは自然で人間らしく思われた」(51)。

悪名高いハイド氏の小切手の支払い人がジーキル博士になっていることを、エンフィールド氏は「ゆすりですよ、これは。ある正直な人物が、若気の道楽でも種に、目玉の飛び出るような法外な金を絞り取られているのだ」(6)、と誤って解釈し、ジーキル博士の遺産相続人がハイド氏になっていることを、アタスン氏は「あれ[ジーキル博士]も若い時分は無茶だった。ずっと昔のことには違いないが、しかし、神様の法則には、時効なんてものはないからな。そうだ、それに違いない。旧惡のたたりだ。かくされた醜行のむくいだ。天罰というものは、あやまちをけろりと忘れてしまって、身びいきから、それを許したつもりでいても、何年もたってから、のっしのっしと、やって来るのだ」(15)と誤解しているが、「時間」という要素を考慮すれば、これは誤解ではなく、本質をついているのである。ハイド氏は若き日のジーキル博士であって、ハイド氏の悪行に苦しむジーキル博士は、若き日の過ちの償いをさせられていることになる。時間的反復としてのダブルである若きハイド氏に変身して、自由と享楽を満喫したジーキル博士は、この変身を若返り、すなわち時間的逆転と受け入れ、自然なものとして感じてしまったために、老いたジーキル博士に戻った今、その行為の恐ろしさにおのきながらも、ついには自分の意志に反した、薬なしでのハイド氏への変身を止めることが出来なくなってしまう。「物にはすべて終りがある。どんな大きな柵目もついに満たされる。ちょっと惡に屈服したばかりにわたしはとうとう魂の平衡まで破ってしまった。しかもわたしは気にもしなかったのである。この墮落も従って、例の薬を発見しなかった昔に立ちかえるように、ごく自然の成行に思われた」(58)。

このような事態を引き起こしたジーキル博士には、自分でも認めているように、必然的にダブルを生み出す二重性が備わっていた。「わたしの最惡の欠点は、抑えることのできない享樂性にあった。この氣質のために多くの人は幸福を味わったであろうが、わたしの場合は、尊大に構えて人前に尋常以上の威嚴をとりつくろっていたというわたしの傲慢な欲望とこの氣質とは、氷炭相容れないものであった。その結果、わたしは自分の快樂を人に隠すことを始め、分別のつく年齢に達して四圍の情況をも觀察するようになり、榮達と社会的地位とを子細に検討

し得た頃には、既に甚だしい二重生活の深みに陥っていたのである」(48)。そして自分の経験を詳細に分析し研究したジーキル博士は、自らの二重性を一般化して、人間の存在そのものが二重性を含んでいると結論する。「かくしてわたしは知性の両面たる道徳的、ならびに主知的見地から、日一日とかの真理、すなわち、人間は実は単一存在ではなくして二元的な存在であるという真理に、着々と近づきつつあった」(48-49)。

ここまでは一応納得出来るとして、その二元的な存在を分離しようと考えるところに、いわゆるマッド・サイエンティストとしてのジーキル博士の特異さが現れている。「わたしはこの善悪二つの要素の分離という着想を、愛する白昼夢として、心楽しく空想するようになっていたのである」(49)。そしてついに薬品によって二元的な人間の一面だけを取り出すことに成功する。しかしジーキル博士のダブルとしてのハイド氏は、ウィルスン2が主人公の良心の実体化と見なされる存在であったのとは逆に、悪の化身として描かれる。ジーキル博士からハイド氏への変身を促す薬品は、逆にハイド氏からジーキル博士への変身に使われるのを見ても分かるように、特に悪の一面を強くする選択的指向性を持ってはいない。「薬そのものは何ら差別的な作用はなかった。それは神を生むものでも悪魔を生むものでもなかった。ただ単にわたしの気質を閉じ込めている獄舎の扉を揺すぶるに過ぎず・・・あの時ちょうどわたしの徳性がうたたねをしたその隙に、野望のために目を覚ましていたわたしの悪が目ざとくもいちはやく機会を掴み、かくして投影されたのがほかならぬエドワード・ハイドなのであった」(51-52)。

もし人間がジーキル博士の言うように善と悪の二つの要素から成り立っているのなら、この薬品の作用によって、ジーキル博士の善玉のダブルが出現する可能性もあったことになる。事実、ジーキル博士は自分の実験の際の動機が不純であったために、悪の一面が表出したと考えている。「もしわたしがわたしの発見を遇するにより崇高なる精神をもってし、高潔敬虔なる向上心に動かされてあの実験をとり行ったのなら、すべてはまったく異なる結果をもたらしたであろうし、ああした生死の苦しみのなかからわたしは悪鬼としてではなく、天使としてあらわれ得たことであろう」(51)。確かにジーキル博士に変身願望を起こさせたのは、享楽を求めるもう一人の自分が、謹厳実直な大学教授としての生活に耐え切れなかったからである。「わたしは無味乾燥な学究生活に対する嫌悪の情に打ち勝ち得なかった。依然として時に逸楽にふけりたい気分になるのであった」(52)。

しかし薬によって死ぬほどの苦痛をへてハイド氏に変身したジーキル博士は、そのうちに薬を必要とせず、苦痛も感じずに、寝ている間にハイド氏になってしまう。「はじめのうちこそジーキルの肉体をぬぎ棄てることに困難を感じたのであったが、近頃では徐々にであるが確実に、困難はかえて逆に反対側に移ってしまっていることをわたしは認めるようになった」(55)。この逆転の結果、ジーキル博士に戻るために飲む薬の量がだんだん増え、回数も多くなってしまふ。言い換えればジーキル博士としての存在を保つために薬品を必要としている。この変化をまるで子供が成長するかのごとくジーキル博士は描いている。「わたしの分身は、最近では非常にからだを使うことも多く、発育も目立ってよくなって来た。エドワード・ハイドのからだは、近頃では背丈もずっと伸び、(わたしがハイドの姿をかりているときの)感じでは、

血液の量も以前より豊富になったのを意識しているように思われた」(54-55)。子供が成人して親を圧倒するように、ハイド氏もジーキル博士を威圧して来ている。ジーキル博士自身はそのことを「わたしは次第次第にわたし本来の善なる自己を喪失し、次第次第にわたしの第二の悪なる自己に合体しつつあるということだ」(55)と解釈しているが、「本来の自己」がはたして善であると言い切れるのか。もし薬が効いている間だけジーキル博士として存在出来るのならば、その人物はジーキル博士と呼べるのだろうか。

先の問題に戻る。なぜジーキル博士がハイド氏を生み出したのか。生まれなかった善の存在はどこへ行ってしまったのか。仮に人間がジーキル博士の言うように二元的存在だとしても、「ジーキル博士とハイド氏」の物語は善と悪の対立の物語ではなく、人間と悪、すなわちタイトルが示すように、ジーキル博士とハイド氏の対立の物語である。そして多くのダブルの場合と同様に、分身が本体を、影が実体を、子供が親に取り代わる話として展開する。「もう一人の自分」であるダブルは、存在した時点で対等の立場を獲得したと言えるのであって、どちらが、本体かと考えるのは無理ではないだろうか。従ってジーキル博士の言う「本来の善なる自己」はジーキル博士を指すのでなければ、意味のない、存在しないものと考えられる。この物語はジーキル博士と、ジーキル博士の生み出した、博士の内にあったハイド氏の葛藤であって、元来一つのものが二つに別れたことから話が始まる。言い換れば、誰でもが内にもつ分裂を外面化したものと言えよう。しかし空間的あるいは時間的反复としてのダブルは存在してはならないものであって、当然予測出来る解決は両者の融合もしくは片方の消滅しかない。ジーキル博士は人間を二元的存在と割り切って解釈し、その要素を融合調和ではなく、分離しようとした時点で、片方の消滅を運命として選択したのである。

もちろんダブルの物語を内なる分裂だけではなく、より大きな枠組みで見ること出来る。「ウィリアム・ウィルスン」をその作者ポーの伝記と照らし合わせると、ウィルスンの誕生日、1813年1月19日（雑誌掲載時では1811年）がポーの公称の誕生日と一致している。ポーは本当は1809年生まれであるが、ウィルスンと同じく、若く思わせるためか実際より2才から4才少なく年令を偽っていた。またウィルスン同様に、イギリスの学寮で幼年時代を送っているし、作中の校長、ブランズビー博士は実在の人物である。またポーは賭博の借金もとで、ヴァージニア大学を退学になっている。さらには養父のジョン・アランとの不和が“father-figure”としてのウィルスン2と主人公の葛藤として表されているのかも知れない。もっと視点を拡大すれば植民地から独立したアメリカとイギリスの関係を読み込むことも可能であろう。

スティーヴンスンの場合も、厳格であったと伝えられる父との対立を読み取れるだろう。文学志望のスティーヴンスンに、父は土木技師になることを勧め、スティーヴンスンは妥協して、アタスン氏のように、一旦は法律家の道を進む。またスコットランド人としてのイングランドとの関係も影響しているかも知れない。

しかし対立、矛盾、分裂はどこにでも存在するのであって、小論では外在的な二重性を探るのではなく、作品に内在する二重性を検討することによって、ダブルの物語を考察したい。テキストに戻って、作品の中にある数多くの二元性、二重性を検討してみると、「ウィリアム・ウ

ィルスン」では冒頭から主人公が、読者の理解と同情を求めている。「死のかげの谷をゆくにあたって、わたしは同胞たちの同情を——むしろ憐憫を、とさえいいたいが——切望している」(626)。そもそもこの物語の設定からして、死に瀕した主人公が自らの生涯の過ちを告白し、自分の力では及ばぬ運命に陥ったことを思いやっで欲しいと語るのである。誰でも主人公のような立場にあれば、主人公のように振る舞わざるを得なかったのではないかと、哀訴しているが、ここにお互いに相入れない、矛盾とでも呼べるような、二つの主張がなされている。主人公は自らの運命の特異性を強調すると同時に、自らの行為を正当化するために、自分のとった行動の妥当性、尋常さを訴えている。

一方ジーキル博士はいままでの禁欲的な学生生活を続けるか、ハイド氏として悦楽の日を送るかを迷っている。「ジーキルと運命をともにすることは、わたしが長い間ひそかに楽しみに耽り近頃では耽溺するようになった数々の欲望を思い切ることである。ハイドと運命をともにすることは、数々の利益や抱負を捨てて、一挙に、しかも未来永劫、侮蔑を買い友を失うことである」(55)。しかしこの選択を誤り、悲劇を招くようになったことをジーキル博士は、自分だけの、特異な経験ではなく、誰にでも起こり得る立場だと考えている。「わたしはこんな奇妙な立場にいるのであるが、この討論の条件というものはおよそ人間の歴史と同じく古くして平凡である。……わたしの場合においても、たいてい大多数の人間がそうであるごとく、たまたま、より善き自己を選びながらあくまでそれを守り抜く力が欠けていたのである」(55)。ウィルスンの場合と同様に、ジーキル博士は、自らの陥った状態を「奇妙」と呼びながら、強いられた選択を、昔から存在する「平凡」なものと考え、自分の行動を「大多数の人間」がとるものと見なしている。

もし、ダブルとかかわる主人公達の性格や環境の異常さ、つまり内面と外面の両方にある二重性が、主人公達が言うように、特殊なものではなく、普遍的なものならば、他の登場人物も、当然相反する二重性を含んでいるわけで、この二つの作品でも、主人公達とそのダブルだけではなく、別のかたちでの反復と逆転を見ることが出来る。

典型的な例をあげるならば、「ウィリアム・ウィルスン」では、主人公が幼年時代を過ごした全寮制の学校の校長が、その村の教会の牧師を兼ねているのだが、主人公はこの人物に大いなる矛盾、相入れない二重性を見ている。「おごそかな、ゆったりした足どりで校長が説教壇に上ってゆく姿を、二階のはるか遠い座席から、わたしはいかに深い驚異と当惑の念とをもっていつも見守ったことだろうか。とても落ちついたやさしそうな顔つき、ピカピカ輝かしい、いかにもお坊様めいて裾長な衣、ぴったり髪粉をふりかけ、とてもいかめしく、とても大きなかつらをつけたこの尊厳な人物——この人が、つい先ごろしうい顔つきで、嗅ぎ煙草くさい着物をきて、木篋を片手に学園の峻厳な掟を司った人なのであろうか。これこそまったく解きたい、なんと途方もない矛盾と思えたことか!」(672)。

「ジーキル博士とハイド氏」においても、この物語の第一行目から、主人公のジーキル博士以上に、その友人であり弁護士であるアタスン氏の矛盾、あるいは二重性が描かれている。「弁護士のアタスン氏は、いかつい顔をした、ついぞ明るい笑顔を見せたいこともない男である。ひ

とと話するときも、よそよそしく、口かず少なく、訥弁で、なかなか感情を顔にあらわさない。痩せて、のっばで、じじむさく、陰気くさかったが、それでいてどこことなく人に好かれるたちであった」(3)。その行動を見ると、もっと矛盾に満ちている。「身を持することは謹厳で、ひとりのときには一杯の葡萄酒をたしなむことさえ差控えてジン酒をのみ、芝居ずきであるのに二十年来、劇場の木戸をくぐったことがない」(3)。このことを、ユーモアを狙った、テキスト上の意図的な撞着と片付けることは簡単であるが、以降のアタスン氏の行動を見ると、明らかにジーキル博士の二重性と対応する矛盾として設定されていることが伺える。

アタスン氏は法律家らしく、「気まぐれ」(the fanciful) など、理性的でないことを嫌い、掟や習慣を順守する保守的な人物として、まず紹介される。「この書類 [ジーキル博士の遺言状] は長いあいだ、弁護士頭痛の種になっていたものだった。弁護士として、また、気まぐれなことは不謹慎なことに他ならぬと考えるような、世の中の穏健な仕来りを愛する人として、彼はこの書類に不快を感じていた」(9)。しかしハイド氏の蛮行の話を聞いたあとで、アタスン氏は気まぐれな想像力に振り回されてしまう。「その問題を、前には、ただ理智的に考えていたのに、今では、想像力までが狩り出され——いや、無理無体に、想像力までが酷使されることになった」(11)。アタスン氏は、深夜の街をハイド氏が駆け回る情景を想像して、夜も寝れないでいる。「その男の影が、忍びやかに、いっそう忍びやかに、寝静まっている家々を出入りしたり、街燈の光の冴えた都会の、広い迷路のようなところを、だんだん足早に、さらにさらに足早に、ついには眼にもとまらぬほどの速さで走りまわって、街角という街角で、子供を踏み倒しては、泣き叫ぶままに打ち捨てて行く場面がみえるのだ」(11)。まるでサイレント映画のこま落としの場面を見るような、強烈な視覚的なイメージではないだろうか。理詰めであるはずの、アタスン氏の想像力、空想力 (fancy) の豊かさを示している。

アタスン氏は対人関係においても不可解な様子を示す。遠縁のエンフィールド氏との友情を見てみよう。「この二人 [アタスン氏とエンフィールド氏] が、おたがいにどんな点を認めあっていたか、またどんな事がらに共鳴しあっていたか、多くの人たちには謎だった。日曜日などに二人が散歩しているのを見かけたものの話では、二人は別に話をするでもなく、ひどくつまらなそうなようすで、誰か友だちでも見かけると、いかにもこれで救われたという顔で声をかけるというのだ。それでいて、二人はこの日曜日の散歩を何よりも大切に……」(3-4)。

もっとも徹底した常識人として、信頼出来る語り手の、アタスン氏にして、このように矛盾に満ちた性格や行動を示すということは、矛盾や二重性そのものが、普遍的な人間性を表しているのではないか。ジーキル博士とアタスン氏を突き合わせることで、ジーキル博士の二重性が特殊なものではなく、普通の人々が内に持つ二重性であることが明らかになる。このことを自家撞着とか不合理と呼んで、排斥するのではなく、こうと一面的に決め付けられない、人間性の複雑さ、豊かさを見なしてはどうか。ジーキル博士の悲劇は、二重性を持っていたことではなく、その二重性の豊かさを否定して、単なる一面だけを純粋に分離、抽出しようとしたことに原因があるのではないか。

ジーキル博士が変身を促す薬品の主成分として、純粋な塩を探し求めていたが、必要なのは不純な塩であったように、ダブルの物語は、こうあるはずであったが、そうではなかった、という二重性における「ずれ」から成り立っている。ウィルスン2を憎悪していたはずの主人公は、「彼に対するわたしの気持は、事によればあるいはたやすく友情にまで成長し得るものだった」(632-33)と述べているし、主人公のいかさまを暴くために入って来たウィルスン2の、突然の登場を、「そのとき突然思いがけない邪魔が入ったのは、一瞬耐えがたい不安の重荷をむしろわたしの胸から取りのけることになった」(637)と感じている。

「ジーキル博士とハイド氏」においても、悪の化身であるはずのハイド氏が、子供とぶつかって、倒れた子供をそのままに、立ち去ろうとした際の、まわりの人々の様子を、エンフィールド氏の語りで見よう。「こら、待て、とわたしはいきなり飛びだして、そいつ [ハイド氏] の胸ぐらをつかんで、元の場所まで引っ返して来たのですが、泣き叫んでいる子供のまわりには、もう大分人だかりがしていました。ところがその男は、まるっきり冷静で、別に手向かいしようでもなく、じろりとわたしを一目みただけです…… [来合わせた] 医者がわたしたちと同じでね、わたしがつかまえて来た男の顔を見るたびに、むらむらと顔を真青にして、そいつを殺しかねない権幕なんです。……わたしたちは真赤になってまくし立てながら、一方、婦人たちをできるだけやつに近づけないようにしていました。婦人たちもまるで鬼女のように復讐に嗔り立っていたんですからね」(5)。ここでも強調されるのは、ハイド氏の冷静さと対照的な、語り手のエンフィールド氏を含めた、まわりの「普通の人々」の凶暴さである。

このような反復と逆転による、二重性もしくは矛盾は、ダブルの物語の構成、プロット、また登場人物の性格、行動に現れるだけでなく、最も根本的なテキストの語り自体に読み取ることが出来る。「ウィリアム・ウィルスン」の第一ページを見てみよう。「しかし少なくとも、人がこんな風に誘惑されたことはいまだかつてなかった、たしかにこんな風に墮落におち込んだことはけっしてなかった、と人々からみとめてもらいたい、いや、おそらくきっとそうみとめずにはいられぬことであろう。かくまで苦しんだ人間がこれまでなかったのも、またそれなればこそであろうか。じっさい、夢の中にわたしは生きてきたのではなからうか。そして、この世のあらゆる妄想の中でも最も荒唐無稽な恐怖と謎の犠牲となって、まさに死んでゆこうとしているのではないか」(626)。下線で示したように、主人公は自分の陥った状況を抜き差しならぬ、人力では抗し切れないものだ、繰り返して強調しているが、その直後に、その状況を「夢」とか「妄想」という言葉で否定している。

また幼年時代の思い出について、「わたしの記憶に、今もカルタゴのメダルの刻銘のように、生き生きした、深い、消えがたい線をもって刻印されているかのように思える印象の数々は、まだ幼年時代に大人のような強さをもってわたしが感じ取ったにちがいないのだ」(629)と、「幼年時代に大人のような」というそれ自体矛盾を含んだ表現で、強く記憶に残ったことを語っているが、すぐに続いて、「しかし、じっさいは——常識的な見方からすれば——記憶するにたるようなものはほとんど何もなかったといえようか」(629)と前言の意味をなくしてしまう発言を行っている。

こういったテキストの書き方を、「曖昧さ」(ambiguity)と呼ぶことも可能であろうが、ダブルの物語にあっては、「反復と逆転」と捉えた方が、主題や構成に見られる二重性が、地のテキストの文そのものに含まれることが明らかになる。例えば、主人公がウィルスン2の寝所に忍び込んで、最初に二人きりで対決しようとする場面である。番号を打って、すこし細かく検討してみよう。「①これが——②いったい、これがウィリアム・ウィルスンの顔立なのだろうか。③なるほど、④たしかに彼の顔だとはわかる。⑤しかしやはり、⑥もしかして彼の顔ではないのではないか、⑦ふとそんな気がして、⑧まるでおこりの発作にとりつかれたようにわたしは身震いした」(634)。大雑把ではあるが、パラフレーズしてみると、「ダブルであるウィルスン2の寝顔を見て、主人公は、①驚きで絶句し、②ウィルスン2を見ていることに自信がなくなる。(自分の顔とそっくりなのだ。)③反応を保留して、④日頃見ているウィルスン2の特徴を確認する。⑤その確認に自信がなくなり、最初に驚きを与えた印象を再び受け、⑥見ている顔がウィルスン2の特徴を示していることを否定し、⑦その否定が意味することに、(自分の顔を見ていることに)思い至り、⑧その恐ろしさ、無気味さに、肉体的反応を示す。」となって、疑問、否定、疑問、肯定の連続、言い換えれば反復と逆転からなっていることが分かる。

さらにこの場面は最後の主人公とウィルスン2の決闘の場面に反復され、また逆転される。「[鏡の中で] すっかり蒼ざめ、血にまみれたわたしの姿が、力なげな、よろめくような足どりでわたしを迎えるように近づいてくるのだった。いや、たしかにそう見えたのだが、じつはそうではなかった。それはわたしの敵の姿だった——断末魔の苦しみにもだえながら、わたしの前に立っていたのはウィルスンだった」(641)。いったいこの姿は主人公なのか、それともウィルスン2なのか。その答えは与えられていない。質問がまちがっているのである。ダブルの物語では、主体と分身が、反復と逆転によって、地位が入れ代わり、ついには区別が出来なくなってしまう。観点を変えれば、ダブルの物語は反復と逆転を連続して提示することで、善悪、老若その他様々な要素が、分ち難く複合して成り立っている、人間性の神秘的な豊かさを、反語的に称賛する物語と言えよう。

「ジーキル博士とハイド氏」にも主人公とウィルスン2の関係と同じことが言える。ジーキル博士の弁明を聞いてみよう。「ヘンリー・ジーキルもエドワード・ハイドの所業を見ては愕然として立ち竦むことしばしばであったが、こういう立場は尋常一様の法則で律し切れるものではないので、内々でうまく良心の手綱をゆるめてやる結果にもなるのであった。要するに罪を犯すのはハイドであり、ハイド一人なのである。ジーキルは少しも悪くなっているわけではなく、一夜明ければまたもとのちっとも損なわれたとは思えない善良な性質に立ち戻っているものであった。そして機会があれば、ハイドの犯した悪事を、機会ある毎に急いで償いさえしたのであった。こうして彼の良心は眠りつづけたのである」(53)。ジーキル博士は抑圧してきた欲望を満たすために、ハイド氏を生み出すが、いつの間にか自己の分身であるはずのハイド氏と自分を切り離し、ハイド氏の悪行はハイド氏の罪であり、ジーキル博士は自らを「善良な」存在と手前勝手な理屈をつける。ここに自ら招いた逆転が生じている。「良心は眠りつづけた」とあるように、本来「ハイド氏+『善の存在』=ジーキル博士」であり、「ジーキル>ハイド」で

あったはずなのに、ハイド氏とジーキル博士が対等の立場になってしまって、「善の存在」がどこかに行ってしまった。「ジーキル＝ハイド」となり、やがて「ジーキル<ハイド」という事態を招いてしまうのである。

予測通り、ある朝目覚めると、ジーキル博士は知らぬうちに、薬もなしに、ハイド氏に変身している。「驚きのあまりただ茫然としてしまって、わたしはかれこれ三十秒も眺めていたに違いない。と急にシンバルでも打ちあわせたかのように、わたしの胸にけたたましく恐怖の念が湧き立った。わたしは寢床からがばと跳ね起きると、まっすぐに鏡の前へ飛んで行った。鏡のおもてを一目見るなり、全身の血がさっと引いて一時に凍りついたようであった。そうだ、わたしはヘンリィ・ジーキルで床につき、エドワード・ハイドで目がさめたのだ」(54)。しかしここでよく考えてみると、この引用の箇所は誰の視点から書かれているのだろうか。あの冷静豪胆なハイド氏ならば、こんなにも恐れはしないだろうし、ジーキル博士ならば心配する事態ではない。常識的に考えて、外見はハイド氏、内面はジーキル博士と解釈するのが妥当であろうが、そうすると、この人物はいったい誰なのか。

もちろん、ジーキル博士の中に入っていたハイド氏の、逆転と見なして、ハイド氏の中にジーキル博士が入ってしまった皮肉な状況と読むことも出来るだろうが、この状態はハイド氏の心をもったジーキル博士の姿を想像するときと同様に、たいして意味がないのではないか。ハイド氏を生み出した時点で、ジーキル博士はハイド氏の中に隠れてしまったので、消滅したわけではない。ジーキル博士という存在には、ハイド氏に代表される要素がつねに付きまといいたように、ハイド氏にはジーキル博士はつきものなのだ。つまり、純粋なジーキル博士、純粋なハイド氏などは存在しないのであって、極端に言ってしまうと、ジーキル博士もハイド氏もたいして変わらないことになる。

ダブルの物語には様々な形態があって、様々な結末が語られているが、その根底にあるのは、自己の反復によって引き起こされる、アイデンティティー喪失の危機、逆転によってもたらされる自己喪失の不安である。しかしこの不安定な状態はすべてのものに内在するもので、ダブルはただ単にその二重性を極端に顕在化したに過ぎない。「ウィリアム・ウィルスン」のおせっかいなダブルも、ジーキル博士の悪の分身も、反復と逆転が連続する過程における、心のひずみが垣間見せた自己の一面であり、そのダブルを抹殺しようとすることや、ダブルを切り離そうとする行為そのものが、人間の人間らしさを否定することになる。しかもこの二重性は登場人物やストーリー、構成だけに見られるのではなく、テキストそのものに、反復と逆転が別ち難く内在している。ダブルの物語はダブルのテキストによって成り立っている。

小論は、1987年6月19日の神戸女学院大学研究所総会での研究発表を加筆訂正したものである。

参考文献

Alter, Robert. *Partial Magic: The Novel As a Self-Conscious Genre*. Berkeley: University of

- California Press, 1978.
- Apter, T. E. *Fantasy Literature: An Approach to Reality*. London: The Macmillan Press, 1982.
- Freud, Sigmund. *The Pelican Freud Library Vol. 14: Art and Literature*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1985.
- Jackson, Rosemary. *Fantasy: The Literature of Subversion*. London: Methuen, 1981.
- Keppler, C. F. *The Literature of the Second Self*. Tucson: University of Arizona Press, 1972.
- 私市保彦。『幻想物語の文法:「ギルガメシュ」から「ゲド戦記」へ』。東京:晶文社, 1987。
- Miller, Karl. *Doubles: Studies in Literary History*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- 水島恵一。『自己探求の心理学:非現実の現実』。東京:社会思想社, 1985。
- Poe, Edgar Allan. "William Wilson." *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*. New York: Vintage Books, 1975. 626-41.
- 引用は松村達雄訳。「ウィリアム・ウィルソン」。『黒猫, 黄金虫, ジーキル博士とハイド氏, ドリアン・グレイの画像』。東京:筑摩書房, 1978。27-51。を一部変更して借用した。
- Rogers, Robert. *The Double in Literature*. Detroit: Wayne State University Press, 1970.
- Stevenson, Robert Louis. "The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde." *Dr. Jekyll and Mr. Hyde & The Merry Men & Other Tales*. London: Dent, 1929. 3-62.
- 引用は田中西二郎訳。「ジーキル博士とハイド氏」。『黒猫, 黄金虫, ジーキル博士とハイド氏, ドリアン・グレイの画像』。東京:筑摩書房, 1978。201-72, を一部変更して借用した。

原稿受理1987年9月9日